

# 英語授業におけるペアワークの研究

## —生徒たちの高めあいのプロセスと教師の支援のあり方—

坂本南美 廣畑陽子 安川佳子 神原克典 吉田 達弘

### 1 研究目的

本共同研究は、2年計画の2年目にあたる。研究目的は、中学校、高等学校の英語授業において、(1) パフォーマンスを重視する活動で、ペアワークを行う学習者たちがどのように学んでいて、お互いに高めあっているのか、また、(2) 生徒たちの高めあいを支援するために、教師がどのように介入していけば良いかを、社会認知的、あるいは、社会文化的理論の枠組みから明らかにすることである。

昨今、小学校、中学校、高等学校での英語授業では、ペアによる学習活動がパターンブックティスから音読、コミュニケーション活動、プレゼンテーションまで幅広く実践されている。学習形態の工夫の一つとしてペアワークやグループワークを取り入れていくことの重要性は、現行の学習指導要領でも言及されている。また、先頃出された中央教育審議会による次期学習指導要領の答申でも、「主体的・対話的で深い学び」(いわゆるアクティブ・ラーニングの視点)として一層強調されている。これらを背景に、今後他者とのやり取りを行いながら協働的に学ぶペアワークやグループワークはさらに重要性を増していくだろう。

ここで重要になるのは、ペアワークという活動形態(方法論)というよりも、むしろ、ペアワークの中で生徒たちにとって質の高い学びが展開されているかどうかということであろう。ペアによる質の高い学びとは何かを考えるためには、ペアワークの中で教師側からは見えない学習者たちの学びの様子に焦点を当てていくことが必要になる。本研究では、そのことを明らかにするために、社会文化的理論を援用する。社会文化的理論では、学習者個人の言語知識の発達の源泉が他者とのやり取りの中にあるとし、他者や使用する道具などによる援助や媒介が発達には重要であると主張する。本研究では、こういった理論的基盤から、ペアの学びを考察する。

しかし、ペアワークによる学びの研究は容易なものではない。なぜなら、ペアの組み合わせやペア同士の関係性によって学習の学びの質が変わってくるためである。質の高い学びを生み出すペアはどのように助け合っているのだろうか。また、うまくいかないペアにはどういった問題が発生しているのだろうか。

Storch(2002)はこの点に注目し、社会文化的理論に基づいて、タスク遂行中のペアのやりとりのパターンを分離し、それがタスク遂行の結果とどのように関係しているのかを調査した。Storch はペアワークによるやりとりのパターンを「対等な関係性(equality)」と「互恵性(mutuality)」という観点から、Collaborative pair、Dominant/Dominant pair、Dominant / Passive pair、Expert/Novice pair の4つのパターンに分類可能であることを示した(図1)。一

年目は、高等学校での英語コマーシャルづくりを報告したが、二年目となる本研究では、昨年度同様、Storch によるインタラクションパターンを参考にしながら、中学校での創作英作文をアウトプットとするペアワークの中で、ペアの中でいったいどのようなことが起きているのか明らかにすることを目的として研究を進めた。

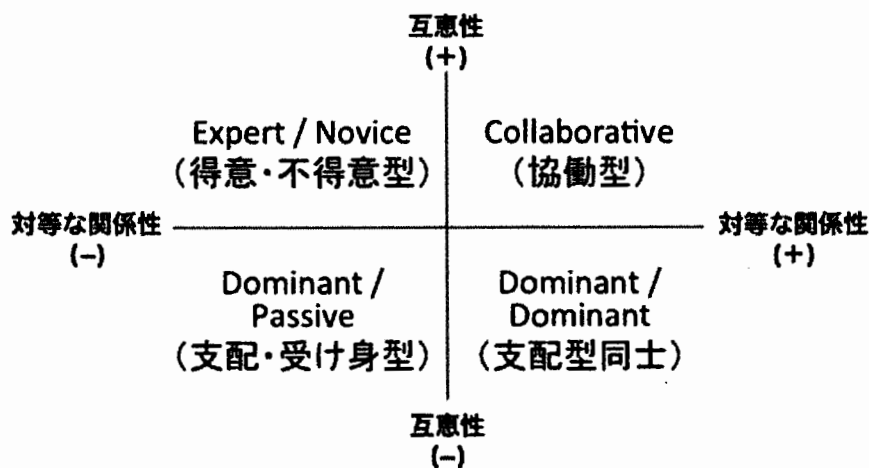


図 1. ペアワークでのやりとりのパターン(Storch, 2002, p.128)

## 2 授業実践

本稿では、兵庫県の公立中学校2年生2クラス(計70名)を対象に行われたペアワークを活用したタスクの実践を報告する。このタスクは50分授業1コマで完結する内容であり、生徒たちにとっては2年生になって5度目のペアによる creative writing になる。これまでのペアによる4回の creative writing は、スキットの原稿を二人で作成する形のタスクであり、最後にクラスで発表会を行い、全員が教室の前に立って発表をした。今回の授業では、まず二人1組のペアを合計35ペア作った。ペアリングはランダムでありながらも英語が苦手な生徒同士にならないような工夫を行ったが、生徒にはその様子はわからないように進めた。そして、パワーポイントを用いて4コマ写真を3度見せながら、これから取り組むタスクについてクラス全体で理解を深めた。パワーポイントを提示する前には、クラスルームトークで干支に関する話を用いて導入し、この年の干支であったサルを用いた画像を矢印の順に提示した。1度目は教師から“Oh, they are monkeys! What are they doing?”などと場面作りを行いながら提示し、2度目は話を具体化させて“He wants to say something? A secret?”といったコメントをはさみながらモデルを示し、最後は教師によるコメントを入れずにゆっくりと画像を流してペアで自由に話し合わせた。その後、語数や内容には制限をかけずに、生徒たちは①～④という写真の順番に沿って自由にオリジナルストーリーを創作した。

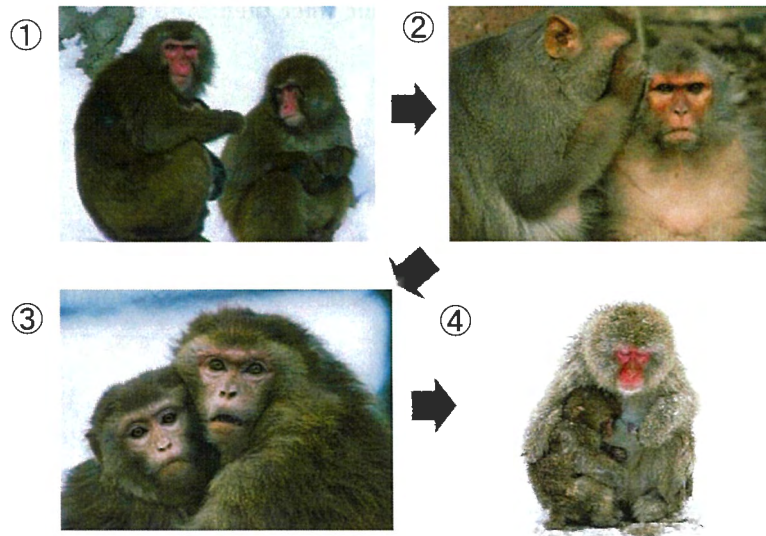


図2 生徒に示した4枚の写真

### 3 分析方法

Storch によるペアの4つのインタラクションパターンを参考に、それぞれのペアにおける学びの過程を分析するため、生徒の発話がタスク遂行の上でどのような役割・機能を持っているかに注目した。ペアワーク中の生徒たちの会話を録音し、役割・機能を発話に付与した(表1)。「役割・機能ラベル」は、活動中の局面でどのようなタイプのやり取りが行われているかを整理するための手段として用い、付与した後は研究グループの英語教師にも見てもらい、付与者の考えと異なる場合には、その都度意見が一致するまで話し合って調整した。

- |              |            |           |              |
|--------------|------------|-----------|--------------|
| ・ リソースの活用    | ・ リソースの必要性 | ・ 困難      | ・ アイデアのすり合わせ |
| ・ アイデアの確認    | ・ アイデアの共有  | ・ アイデアの相違 | ・ アイデアの提案    |
| ・ イニシアティブの転換 | ・ 解決       | ・ 確認      | ・ 応答         |
| ・ 活動の修正      | ・ 作業内容の確認  | ・ 支援      | ・ 修正         |
| ・ 承諾         | ・ 提案       | ・ 問いかけ    | ・ 教師による評価    |
| ・ 教師による支援    | ・ 活動の脱線    |           |              |

表1 対話に見られた「役割・機能」

### 4 結果と考察 ペア A の学び：相手の言葉を引き出す反復やあいづち

今回、紙幅の関係により、本報告書ではペア A の学びのみを取り上げる。ペア A は以下のようなアウトプットを完成させた。

<作品>

1. Hey, do you want to make money?
2. I have good news. A lot of treasure have been buried beyond the ocean.
3. Oh, my God!! Let's go there as early as possible! We can get a lot of money.

4. Ten years later, they had not come back home since then. And nobody all over the world could hear their story.

このペアは、YとMの男女のペアである。女子生徒Mは生徒会役員も務め、英語が好きな生徒である。男子生徒Yは、理解の力は高いが、授業中は自ら目立とうとするタイプではない。しかし彼のアイデアや独創性はとても豊かなので、教師の見立てとしては、Mの英語のリードでYのアイデアを用いて作品を完成させる支配・受け身型 (Dominant/Passive) のペアだった。まず1枚目と2枚目の画像について話している場面を見てみる。

- |   |       |
|---|-------|
| 35 M 「ちょっと」って何って言うの。                                    | 問い合わせ |
| 36 Y ちょっと? Hey! Hey you!                                | 応答    |
| 37 M Hey you. Hey,,, Hey.                               | 確認    |
| 38 Y (つぶやくように) Do you want, 名詞? 動詞?                     | 問い合わせ |
| 39 M え, Don't you?                                      | 修正    |
| 40 Y (つぶやくように) Do you want to do money making? いや...    | 問い合わせ |
| 41 M Do you, ほんまに money making?                         | 問い合わせ |
| 42 Y それ一つの単語だったらあれやん。                                   | 応答    |
| 43 M それで2枚目が。   | 問い合わせ |
| 44 Y 2枚目が, 「いい金もうけの話があるんだ。<br>向こうの方に宝があるんだよ」みたいなことを言って。 | 応答    |

Mの35『「ちょっと」ってなんていうの?』に対して、Yは36「ちょっと? Hey! Hey you!」と応答しているが、38になると「Do you want 名詞? 動詞?」と独り言のようにつぶやいている。この前の部分で「一儲けしたくないかい?」という表現に決めていたので、Mが「え, Don't you?」と修正をかけようとしたが、Yはそれには答えずに「Do you want to do money making? いや...」とやはり独り言のような発話を続ける。その後、Yは、独り言からMに対する発話に戻っている(42「...あれやん」)。この35からの部分では提案的にも聞こえる独り言を挟みながら、二人はやりとりを展開させているが、それに対してMは怒る様子もなく、43「それで2枚目が?」と次のコマへの橋渡しとなる言葉で活動をうまく展開させていた。Mによるこの発話もそうだが、このペアの大きな特徴は、聞き手になっているMの応答がとてもスムーズに会話を発展させ、活動にリズムをつけているという点である。

- |   |       |
|---|-------|
| 81 M ほんまやな。あ、えっと、たくさんのお金が主語にして。                             | 提案    |
| 82 Y たくさんのお宝を主語にして。   | 確認    |
| 83 M たくさんのお宝が主語にして、   | 確認    |
| 84 Y My eraser is gone..., gone. 今のも録音されとるんか。<br>ちょっとまずいなあ。 | 活動の脱線 |

- 85 M え、何言った？ 問いかけ
- 86 Y My eraser is gone. 応答
- 87 M あはは。 宝、これ何て読むか分かる？ 活動の修正
- 88 Y ん？ トレジャー。 a lot of treasures, 眠っている。 応答
- 89 M sleep. 確認
- 90 Y 眠っているって、まんまでいいんか。 問いかけ
- 91 M 眠っているっていうか..., 提案
- 92 Y 埋まっている？ 問いかけ
- 93 M 埋まっている？ 隠されたというか、埋まっている。 確認

Yによる82「たくさんのお宝を主語にして」というつぶやきに対して、83「たくさんのお宝が主語にして」とMが反復する場面もそうだが、Mによる反復がとても多いことがこのペアの大きな特徴である。

- 111 M でもこれ埋まっているってさ、何か、あれじゃない、  
何か、進行形じゃない？ 問いかけ
- 112 Y あ、あ、ha...そうか！ 応答  
現在何ちゃらほいほいしなあかんのか。  
Treasures have, have にしなあかんなあ。 確認  
昔から埋まっているっていうことやる。 問いかけ
- 113 M あ、そうか、そうか。 have... 応答
- 114 Y treasures have... 確認
- 115 M has か？ have やな。 確認
- 116 Y have..., a lot of って複数形やな。 確認
- 117 M 複数形やから have。 応答
- 118 Y have, 埋まっている。 確認
- 119 M treasures have。 確認
- 120 Y 「埋まっている」がまずなんやねん。 困難  
これだったら been 付けたら、埋められているになるからな。 確認
- 121 M 過去分詞形？ 問いかけ
- 122 Y まず埋まるが..., 埋める..., 確認  
埋める...埋める。(辞書を見ながら)

Mによる反復と同時に、簡潔なあいづちも見られる(113)。一見、Yが主に活動を引っ張っているように見えるやりとりだが、よく見てみるとMによるあいづちと復唱が、Yの発話を促し、それによって二人のやりとりが進んでいることが見て取れる。

また、この実践を行うまでに、授業では、言語材料として現在完了形を取り扱っていたが、Yによる112「現在何ちゃらほいほい」という発話は、その後のやりとりから、既習

事項の現在完了形のことを指していることがわかる。受動態の現在完了については高校の範囲であるため、この段階では未習事項のはずであるが、Yは、120「これだったら been 付けたら、埋められているになるからな」という発話をしている。Yの中で現在完了の知識と受動態の知識が混ざり合い、二人の<作品2>では、その文が、“A lot of treasure have been buried beyond the ocean.”と表現された。二人がやりとりの中で、既習の知識を発展的に積みあげながら、新しい言語的気づきを引き出している様子がうかがえた。また、bury「埋める」という英単語も未習であったが、辞書を用いて単語の意味を拾うなど、このペアは、一度に多くのことを考え、処理しながら発展的に活動が進められていた。このペアは、当初はMのリードで進めていく支配・受け身型 (Dominant/Passive) だという見立てであったが、Storch による平等性と互惠性を見ていくと、このペアは、活動の途中から、協働型 (Collaborative) 、または、Yがリードしている得意・不得意 (Expert/Novice) のやりとりとなっていたことがわかった。

## 5 まとめ

今回の研究で分析した他のペアを見る中で、異なる個性を持つ生徒たちがペアワークの中で起こした「化学反応」は、生徒同士の関係性やタスク達成のための対話の質などが影響して、個々のペアによって異なるものであった。また、それぞれの発話に「機能・役割ラベル」を付与していくことで、ペアの中でタスクに対する関与がどのように促されているかが可視化され、実践者として教室理解を大きく深めることにつながった。ペアワークの素晴らしさは、一人では難しいこともペアだからこそチャレンジできる話題や内容の広がりがあることである。二人の間にタスクをめぐる対話が生まれ、それによってお互いに支援し合う関係が作られていくことにある。また、ペアワークではペアの中での関係性やお互いへの安心感も学習者たちの間に大きな影響をもたらす。タスクの自由度と活動にかける制約を教師がきちんと捉えてタスクデザインを行うことで、ペアの中で対話を生み出すための要素として機能していくと言える。そうすることで、今回のような言語的な気づきが促されたり、タスクを行う中で互いへの安心感といった情意的側面が影響したりすることも垣間見えた。本稿には記載できなかったが、教師の介入がペア内の関係性にもたらす影響も見え隠れしたのもあった。教師の見立てとは異なるペアワークの様子を見て、さらに教師の介入や教師のサポートがどのように彼らの潜在的な力を引き出せるか、という視点を深めていきたい。

なお、本稿で報告した実践の他、高等学校でのペアワークの実践も加えた論考が、「KELES ジャーナル」第2号 (関西英語教育学会) に掲載された。

## 参考文献

Storch, N. (2002). Relationships formed in dyadic interaction and opportunity for learning. *International Journal of Educational Research*, 37(3-4), 305- 322. doi:10.1016/S0883-0355(03)00007-7